ー探求・川にちなんだ万葉集の歌ー

万葉の川心 第20回

川崎市立木月小学校教諭　舩田　園子

相模の國の歌

足柄と戸肥の河内に出づる湯の世にもたよらに兒ろがいはなくに

（巻第十四　三三六八番歌）

「温泉に行こう。」ひさしぶりの電話を詫びることもせず、母を誘った。「そろそろ紅葉も始まるし、温泉宿でゆったりしたお湯につかって、それから、おいしいものを食べよう。やっぱりお刺身がいいかな。」娘は、母がその気になるように、そして、「何かあったのかしら…」などと、余計な詮索を入れる隙を与えないように、話し続ける。

「たまにはのんびりしようよ。」

親孝行がしたいとか、そんなことではなくて、二人で、ただゆっくり話したいときが、ある日突然、「娘」に、やってくるのである。「母」であると同時に、かけがえのない「友」になる瞬間。それは、うるさいだけと思っていた母が、自分の中でとてつもなく大きな支えになっていたと知る瞬間かもしれない。

「めずらしいわね。」

と言いながら、それでも、すぐに母は承知した。本当はというと、「娘」の方がのんびりしたいのだ。親友以上に何でも話せて、それでいて、何にも話さなくてもいい「友」。価値観がとても近くて、でも、ぶつかるときは、思いきりぶつかり合える。日頃から、結婚式の花束贈呈なんて絶対やめようと話し合っている照れ屋な母娘を、「温泉に行こう」という言葉は、暖かく包んでくれるのである。

万葉の時代にも、温泉があり、歌に詠まれていた。『出雲風土記』に千歳川水域の湯河原谷のことである。河内は、川に沿っているところの意で、土肥は、湯河原町・真鶴町の総称である。ここは、おそらく、万葉の昔から名の知れた温泉だったと思われる。歌の中の「たよらに」の意味には、ほとばしり豊富な様、力強い様をあらわしているというものと、動揺することをあらわしているという説がある。「たよらに」は、「たゆらに」ともあり、すると、「たゆたふ」という言葉がすぐ浮かんでくる。それは、「（舟などが）揺れ動いて定まらない、ただよう」様子を言う。以上から、この歌は、「足柄の土肥の河内に湧き出る湯のように、ほんとうに心が動いてあなたに決めかねておりますとは、あの娘は言わないのになあ。」といった、解釈になるだろうか。つまり、いとしく想う娘は「動揺して、心が揺らいでいる」などとは言っていない。言っていないのだから、信じればいいのである。そうはいっても、あの娘は、いったいどう思っているのだろうか。はたから見ていると滑稽かもしれないが、恋の台風の中にいては、ますます相手が見えなくなる。湯は湧き続ける。熱い想いもまた同じ。なんど聞いても、また聞いてしまう。

「君の心は…」

湯河原温泉の宿が立ち並ぶ、ちょうど真ん中あたり、藤木川と千歳川が合流する手前に、美しい緑の公園「万葉公園」がある。園内には万葉の歌に詠まれた草花八十種近くが植えられている。ゆっくりと歩くと心が不思議と落ち着いてくる。その公園の入り口にこの碑は建てられていた。湯河原には「こごめの湯」（子宝の湯）があり、こちらは、鎌倉時代からのいわれがあるそうだ。

母の隣で湯浴をしながら、心がつぶやいた。

「あなたの娘でよかった。」

きっと、だれもがいつか、そう思うのではないだろうか。